

子供たちと楽しく朗読10年も

名作や童話を月2回

山田和子さん(福祉14期)

学習支援では珍しい“読み聞かせ”を10年以上も続けている山田和子さん(福祉14期、若葉台在住)。この冬1番の寒い朝となった12月6日、桜の宮小を訪ねて授業ぶりを見学させてもらった。この朝、山田さんは『半日村』と『おおきなかぶ』というタイトルの大型絵本2冊を持参して8時過ぎに2年生の教室に現れた。

「おはようございま〜す」。教室中が急ににぎやかになる。「きょうは何やる。かぶは知ってるで」。黒板の前に机を置いて8時20分から朗読開始。まずは『半日村』。大きな山があって1日のうち半日しか太陽が見えないという村で、子供たちや村人たちが総出で山の土を削り、湖に運んで湖を埋めてしまうというお話。

『おおきなかぶ』は、ねずみ・ねこ・おばあさん・おじいさんが力を合わせ、よっこらしょ、どっこいしょと大きなかぶ(蕪)を引っこ抜くという愉快なお話。22人の子どもたちは一生懸命に聞いている。読み終わると「ありがとうございました!」と大声でお礼の言葉が飛び交う。

山田さんが朗読の道にのめりこんだのはK S C在学中に入った「あかりの会」がきっかけ。朗読



2年生の教室で絵本の朗読をする山田さん

や紙芝居をあちこちの施設で披露するクラブだ。養成講座に通って発音や発声の練習を重ねた。その後、グループ〈わ〉の紹介で桜の宮小で読み聞かせをするようになった。今は月2回のペースで、2年生相手に朝の授業の前に絵本を読む。子供たちの前で読む本は1年間にざっと40冊にもなる。大型絵本は重いので持参するのも大変。灘区に住む娘さんに手伝ってもらって中央図書館から借りて来る。子どもたちに人気なのは、やはり名作や童話など面白い本。子供たちの笑顔を見ると、やってよかった、と自分も嬉しくなる。

桜の宮小にはもう1組、1年生相手に読み聞かせをしているグループがいる。南形徹(生環14期)、公子(福祉13期)夫妻だ。こちらは飽きないように簡単なマジックも披露している。2年生も1年生も子供たちは大喜び。月2回の朗読の日を楽しみにしており、先生たちからも感謝されている。

山田さんはすでに10年も続けているので、「そろそろ次の方にバトンタッチしたいと思っています。引き受けてくれる方いませんかねえ」。

(取材・南形徹、写真・芦田義和)



【最近の心境をうたった山田さんの短歌】

読み聞かせ吾待ちくれし子たちから元気もらいて
十年たちぬ

「かぶ」の話を熱心に聞く子供たち



ボランティアの現場 ⑦